

# 絵馬

季は	十二月	地は	伊勢	後	シテ ツレ ツレ （天女） （力神）	天照大神 天鈿女命 手力雄命	前	ワキ シテ ツレ 里の翁 里の嫗	勅使
----	-----	----	----	---	--------------------------------	----------------------	---	------------------------------	----

「治めしまゝに世を守る。く。伊勢の宮居に参らん。

詞 「そもそも是は大炊の帝に仕へ奉る臣下なり。さても我君伊勢太神宮を信じ給ひ。数の御宝を捧げ給ふ。其勅を蒙り。唯今伊勢参宮仕り候。

道行 「風は上なる松本や。く。雲雀落ちくる粟津野の。草の茂みを分け越して。瀬田の長橋うち渡り。野路篠原の草枕。夢も一夜の旅寐かな。く。

詞 「急ぎ候ふ程に。是は早勢州斎宮に着きて候。今夜は節分にて此所に絵馬を掛くると申し候ふ間。今夜は此所に逗留し。絵馬を掛くる者を見ばやと存じ候。

シテ、ツレ一声  
「新玉の。春に心を若草の。神も久しき恵みかな。  
ツレ  
「霞も雲も立つ春を。

二人 「去年とやいはん年の暮。

シテサシ  
「それ馬を華山の野に放ち。牛を桃林に繫ぐ事。

二人 「皆聖人の事業かな。それは賢き世の習ひ。時に引  
かれて四方の海の。浜の真砂を数へても。君が千  
年のある数を。喻へても猶有難や。

下歌 「千早振る。神代を聞けば久堅の。

上歌 「天つ日嗣の代々ふりて。く。人皇末代の子孫ま  
で。ありし恵みを受け継ぎて。治まる御代の我等  
まで。及ばぬ君を仰ぎつゝ。夜昼仕へ奉る。く。  
ワキ詞 「如何に是なる人々に尋ぬべき事の候。

シテ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ 「今夜は此所に絵馬を掛くると申し候ふは誠にて候  
ふか。

シテ 「さん候即ち我等が絵馬を掛け候ふよ。

ワキ 「それは何の謂に依つて掛けられ候ふぞ。

シテ 「是は唯一切衆生の愚痴無智なるをかたどり。馬の  
毛により明年の日を相し。又雨しげき年をも心得  
べき為めにて候。

ワキ

「さてくく今夜は如何なる絵馬を掛け。明年の日を  
相し給ふ。

ツレ「誓ひはいづれも等しけれども。まづ雨露の恵みを  
受け。民の心も勇みある。夜道の黒の絵馬を掛け。  
国土豊かになすべきなり。

シテ詞  
「暫く候。耕作の道の直なるをこそ。神慮も悦び給  
ふべけれ。まづ此尉が絵馬を掛け。民を悦ばせば  
やと思ひ候。

ツレ「左様に謂を宣はゞ。此方も更に劣るまじ。力をも  
入れずして。天地を動かし目に見ぬ鬼神の。猛き  
心を和ぐる。歌は八雲を先として。天ぎる雪のな  
べて降る。是等はいかで嫌ふべき。

シテ  
「かくしも互に争はゞ。隙行く駒の道行かじ。いざ  
や二つの絵馬を掛けて。万民楽しむ世とならん。  
ツレ「実にいはれたり此程は。一つ掛けたる絵馬なれど  
も。

シテ「今年始めて二つ掛け。雨をも降らし。

ツレ「日をも待ちて。

シテ「人民快樂の。

ツレ「御恵みを。

地「掛まくも忝なや。是をぞ頼む神垣に。絵馬は掛けたりや。国土豊かになさうよ。賀茂の御あれのひをりの日。く。是を物見に御隨身。色めく紙の四手つけて。駆けならべたる駒くらべ。掛けでや

さしく聞えしは。松風の上の藤波。尾上の花に咲き添へて。棚引く白雲。又掛けで色をますなり。

クセ「僧正遍昭は。歌の様は得たれども。まこと少なし喻へば。絵にかける遊女の。姿にめでゝ徒に。心を動かすは浅緑。糸よりかけて繫ぐ駒は。二道掛けで中々。恨みしは恋路の空情。逢ふさへ夢の手枕。

シテ「忍ぶ今宵の顛はれて。

「言葉をかはす此上は。何をか包むべき。我等は伊勢の二柱。夫婦と現じ立ち出づる。信ずべし信ぜば。疑ひ波の川竹の。夜も明け行かば内外にて。待ち得てまみえ申さんと。夜半にまぎれて失せにけり。く。(申入)

「雲は万里に治まりて。月読の明神の御影の。尊容を照らし出で給ふ。

後ジテ「我は日本秋津島の大棟梁。地神五代の孫。天照太

神。

地「和光利物の御裳濯川の。水を蹴立つる波の如し。されども誓ひは。虚空に満ち来る五色の雲も。輝き出づる日神の御姿。有難や。

「所は斎宮の名に旧りし。

地「所は斎宮の名に旧りし。神垣しどろに木綿四手の。あらはに神体顯はれ給ふ。有難や。(中の舞)

シテ「昔し天の岩戸に閉ぢ籠りて。

地  
「天の岩戸に閉ぢ籠りて。悪神を懲らしめ奉らんと  
て。日月二つの御影を隠し。常闇の世のさていつ  
までか。あらぶる神々是を歎きて。いかにも御心  
取るや榊葉の。青和幣白和幣。いろいろさまぐ  
に。うたふ神樂の韓神催馬樂。千早振る。(天女神樂)  
シテ  
「おもしろや。

地  
「おもてしろやと。覚えず岩戸を少し開いて感じ給  
へば。いつまで岩戸を手力雄の尊は。引きあけ御  
衣の袂にすがり。引き連れ顕はれ出で給ふ有様。  
又めづらしき神遊びの。面白かりしを思し召し忘  
れず。高天の原に神とゞまつて。天地二度開け治  
まり。国土も豊かに月日の光りの。長閑けき春こ  
そ久しけれ。